

2025年1月15日
一般財団法人化学及血清療法研究所

第6回『太田原豊一賞』受賞者が決定しました

一般財団法人 化学及血清療法研究所（理事長：馬場秀夫、所在地：熊本市中央区）は、第6回『太田原豊一賞』の受賞者を決定いたしましたので、お知らせいたします。

受賞者には、賞状、トロフィーのほか、副賞1,000万円が贈られます。

太田原豊一賞は、感染症領域および血液領域を中心に顕著な功績を上げられた研究者に対して、当財団の創業者である太田原豊一の名前を冠した『太田原豊一賞』を授与、顕彰することにより、「広く公衆衛生の進歩を図り、兼ねて自然科学の昂揚に資する」という当財団の使命を果たす事業の一環として取り組んでおります。

記

小川 誠司（おがわ せいし）先生

京都大学大学院医学研究科 腫瘍生物学講座 教授

受賞研究テーマ：骨髄異形成症候群および関連疾患の病態解明と臨床応用

朝長 啓造（ともなが けいぞう）先生

京都大学 医生物学研究所 RNA ウイルス分野 教授

受賞研究テーマ：ボルナウイルス感染症の包括的理解に関する研究



小川 誠司 先生



朝長 啓造 先生

以上

受賞者の研究テーマおよびご略歴

小川 誠司（おがわ せいし）先生

受賞研究テーマ：

骨髄異形成症候群および関連疾患の病態解明と臨床応用

小川先生は、骨髄異形成症候群（MDS）および関連血液疾患の分子病態解明において、世界をリードする画期的な研究成果を挙げてられました。

MDS は、高齢者に多く見られる難治性の血液腫瘍で、血球減少や形態異常、急性骨髄性白血病（AML）への移行を特徴とし、日本国内でも年間約 1 万人が発症する重要な疾患です。小川先生は最先端のゲノム解析技術を駆使し、長年不明であったこの疾患の分子メカニズムの解明に取り組み、診断技術や予後予測技術に貢献されてきました。特に RNA スプライシング因子変異の発見は血液学研究におけるランドマーク研究の一つであり、MDS 患者の約 60% に認められる重要な遺伝子変異であることが明らかになりました。さらにこの発見は、生物の基本メカニズムである RNA スプライシング因子の体細胞変異が人の疾患発症に関与することを示した世界初の報告として、国際的に高く評価されています。

小川先生は国際的な共同研究も多数展開しており、*DDX41* 遺伝子の胚細胞変異が遺伝性白血病・MDS の約 8 割を説明する最大の遺伝的要因であることを解明するなど、遺伝性の血液腫瘍研究においても重要な発見をされました。さらに、再生不良性貧血における「クローン性造血」の存在とその臨床的意義を明らかにするなど、MDS と関連の深い一連の疾患の理解にも大きく貢献されています。

2022 年に報告された、ゲノムプロファイリングと血液学および細胞遺伝学的パラメータを組み合わせた MDS の新たな予後予測分類システム（IPSS-M）の構築においては、日本からの 700 例に及ぶ症例解析を通じて重要な貢献を果たされました。現在このシステムは遺伝子変異に基づく予後予測分類の国際標準として世界で広く用いられています。

小川先生は MDS とその関連疾患研究への貢献にとどまらず、沖縄・九州など西南日本で好発する成人 T 細胞白血病リンパ腫（ATL）の発症メカニズムの解明や、脳腫瘍や腎がん、食道がん、乳がんなど、様々な固形腫瘍の研究においても重要な成果を上げています。特に、PD-L1 遺伝子の構造異常を介したがんの免疫回避機構の解明や、がんの発症基盤となる正常組織におけるがん遺伝子変異の研究など、がん研究全般において画期的な発見を続けています。

これらの研究成果は、難治性血液疾患の診断・治療法の開発のみならず血液学の進歩に大きく貢献するものとして高く評価され、今回の受賞につながりました。

ご略歴：

学歴

1988年	東京大学医学部医学科 卒業
1992年	東京大学大学院医学研究臨床第一医学専攻修了 博士（医学）取得

職歴

1993年	東京大学医学部附属病院 非常勤医員
1996年	日本学術振興会 特別研究員
1997年	東京大学医学部附属病院 第三内科 助手
2002年	東京大学造血再生医療寄付講座 特任准教授
2008年	東京大学がんゲノミクスプロジェクト 特任准教授
2013年-現在	京都大学大学院医学研究科腫瘍生物学講座 教授
2015年-2021年	スウェーデンカロリンスカ研究所 客員教授

受賞歴

2010年	日本癌学会 JCA-Mauvernay Award
2011年	文部科学省科学技術・学術政策研究所ナイスステップな研究者
2013年	日本血液学会学会賞
2013年	日本医師会医学賞
2014年	公益財団法人SGH財団 SGH特別賞
2014年	持田記念医学薬学振興財団 持田記念学術賞
2016年	高松宮妃癌研究基金学術賞
2019年	ベルツ賞 1等賞
2023年	日本癌学会 吉田富三賞

朝長 啓造（ともなが けいぞう）先生

受賞研究テーマ：

ボルナウイルス感染症の包括的理解に関する研究

ボルナウイルスは、人に致死性脳炎を引き起こす人獣共通感染性の RNA ウイルスです。朝長先生は、25 年以上にわたりボルナウイルスの研究に一貫して取り組み、日本のウイルス学を牽引してきました。その独創的な研究は、感染症領域にとどまらず、生命科学や医学の幅広い分野に多大な影響を与えています。

朝長先生は、ボルナウイルスが公衆衛生に与える脅威が不明だった当初から神経病原性に着目し、2003 年のウイルス遺伝子を脳内で発現するトランスジェニックマウスを用いた研究では、ウイルスのリン酸化タンパク質の蓄積が、神経変性疾患に共通する分子機構を介して神経病原性に関与することを明らかにし、神経ウイルスの病態機構の解明において画期的な成果を挙げられました。

朝長先生の長年の研究の中で特筆すべき成果の一つとして、RNA ウイルスとしては極めて珍しい、宿主染色体を利用した持続感染メカニズムの解明が挙げられます。この研究により、ボルナウイルスの感染機構やその後の内在化機構の理解が飛躍的に進展しました。また、朝長先生は画期的な発見として、ヒトを含む哺乳動物のゲノムにボルナウイルス由来の遺伝配列が内在化していることを明らかにしました。この発見は従来のウイルス学の常識を覆し、ウイルス共進化学やゲノムウイルス学という新しい学問領域の潮流を生み出しました。さらに、内在化したボルナウイルス配列から産生されるタンパク質や RNA の機能を解明し、1 億年以上にわたる RNA ウイルスと宿主との共存および共進化の証明に成功したことは、RNA ウイルスが進化単位でどのようにパンデミックを繰り返してきたかの理解を深める重要な知見となりました。一方、2011 年には組換えボルナウイルスの作製技術を独自に開発して後続の研究に重要な貢献を果たしたほか、2019 年から 2023 年の研究においては実用化レベルの新規ウイルスベクターの開発に成功するなど、独自の基礎研究の成果を応用させることでウイルス研究の飛躍的な展開に寄与されています。

以上の業績は、ボルナウイルスの研究にとどまらず、希少感染症の研究全体を牽引してきた点において、感染症研究への貢献として極めて大きなものです。その功績が認められ、病原体の脅威評価を担う世界保健機関（WHO）の専門家メンバーおよび分科会議長に選出されています。国内外で卓越したリーダーシップと指導力を発揮してご活躍する朝長先生の、長年にわたる独創的かつ唯一無二の研究業績とこれまでの感染症研究への多大な貢献が高く評価され、今回の受賞となりました。

ご略歴：

学歴

1990年	鹿児島大学農学部獣医学科 卒業
1994年	東京大学大学院農学研究科獣医学専攻 博士課程修了 博士（獣医学）取得

職歴

1994年	東京大学大学院農学研究科獣医微生物学教室 博士研究員（学振特別研究員）
1995年	米国ボストン タフツ大学医学部 博士研究員
1998年	北海道大学免疫科学研究所 助手
1999年	大阪大学微生物病研究所 助手
2000年	大阪大学微生物病研究所 准教授
2011年-現在	京都大学ウイルス研究所（現・医生物学研究所）教授
2012年-現在	京都大学ウイルス研究所（現・医生物学研究所）附属感染症モデル研究センター センター長
2018年-2019年	京都大学ウイルス・再生医科学研究所 副所長
2022年-現在	京都大学医生物学研究所 副所長

受賞歴

2002年	日本ウイルス学会 杉浦奨励賞
2017年	野口英世記念医学賞